

小学校児童の住空間に対する認識と志向

(第4報) 児童の住空間に対する要求

中 島 喜代子

Primal School Children's Recognition and Directional Intention of Dwelling House and Home Life (Part 4)

Housing Demands of Primal School Children

Kiyoko NAKAJIMA

1. 結 言

本研究の第1報では、児童が居住する住宅における生活用品の配置・収納場所に対する認知の側面を検討することにより、具体的な住空間実態についての児童の認識の情態を把握した。第2報では、児童をとりまく家庭環境の実態に対する認知の側面を検討することにより、家族生活を含んだより広い住空間の実態についての児童の認識の情態とそれに影響をおよぼす要因について明らかにした。さらに、第3報では、児童が居住する住空間に対する評価判断と評価内容を検討することにより、児童の住空間に対する認識の情態とそれに影響をおよぼす要因について明らかにした。

引き続き、本報では、児童が居住している住空間の諸側面に対してもつ児童の要求と、母親のそれとを比較検討することにより、児童の住空間に対する興味・関心の方向と発展動向を把握し、児童の住空間認識と志向を明確にすることを目的とする。

分析の手順は、まず子ども部屋に対する児童の要求を学年別、性別に分析する。次に、各住空間別に〈空間拡大要求〉〈家具配置がえ要求〉〈専用室要求〉〈設備要求〉について、児童と母親の要求を学年別に比較分析する。

2. 研究方法

調査対象、調査方法、調査時期については前報までと同様で、四日市市の小学校3年生～6年生の児童とその母親を対象として、間接留置式のアンケート調査を、昭和58年7月に実施した。その結果、児童とその母親各530件の有効サンプルを得た。本報は、この530件の有効サンプルについて分析を行なう。なお、調査対象の概要は、第1報に示すとおりである。

3. 調査結果および考察

1) 子ども部屋に対する児童の要求

(1) 子ども部屋所有における実態と希望

子ども部屋所有に対する児童の要求を、子ども部屋の所有実態との関連からとらえるため、子ども部屋所有の形態を「専用子ども部屋」(自分一人だけの子どもべやがある)、「共用子ども部屋」(兄弟といっしょの子どもべやがある)、「子ども用コーナー」(子どもべやはないが、自分の机やもち物をおく場所がある)に分類した。学年別の子ども部屋所有実態を、図1に示し、子ども部屋所有に対する希望を、図2に示す。

子ども部屋の実態は、学年が進むにしたがって「専用子ども部屋」を所有する児童の割合が増加し、逆に「子ども用コーナー」の割合は減少している。「専用子ども部屋」と「共用子ども部屋」を合わせた、子ども部屋所有率は、3年生から6年生にかけて、それぞれ62.2%、74.1%、76.8%、81.2%と順次増

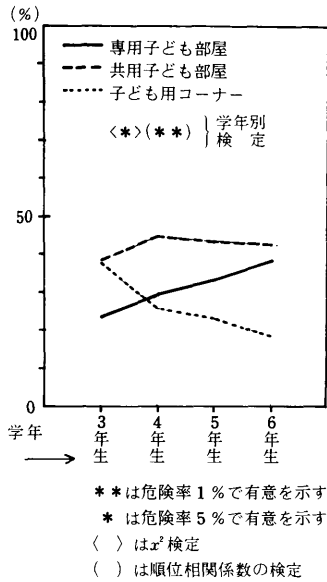


図1 学年別子ども部屋所有の実態

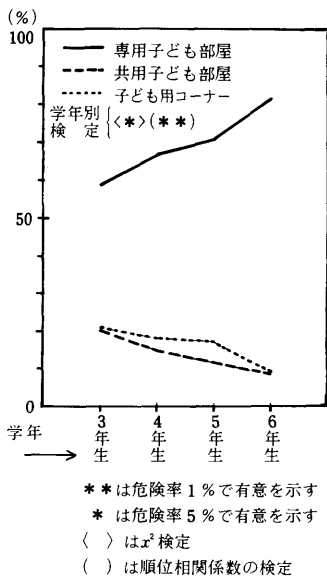


図2 学年別子ども部屋所有に対する希望

加しており、3年から4年生になると子ども部屋所有率は急増し、6年生では80%を越えている(χ^2 検定5%水準、順位相関係数の検定1%水準で有意)。

子ども部屋所有に対する希望においても、学年が進むにしたがって「専用子ども部屋」希望が増えて

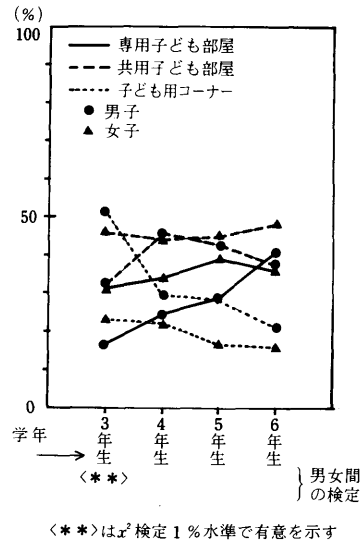


図3 男女別子ども部屋所有の実態

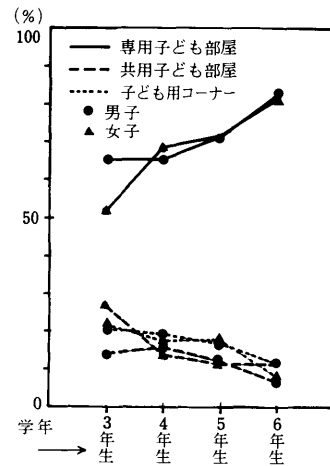


図4 男女別子ども部屋所有に対する希望

いる(χ^2 検定5%水準、順位相関係数の検定1%水準で有意)が、その割合は実態の場合よりはるかに多くなっており、学年進行による増加率も実態の場合より大きくなっている(図2)。

次に、学年別・男女別に子ども部屋所有の実態を図3に示し、子ども部屋所有に対する希望を図4に示す。子ども部屋所有の実態をみると、「専用子ども部屋」所有の割合は、3年生～5年生までは女子の方が多く、6年生では逆に男子の方が多くなってお

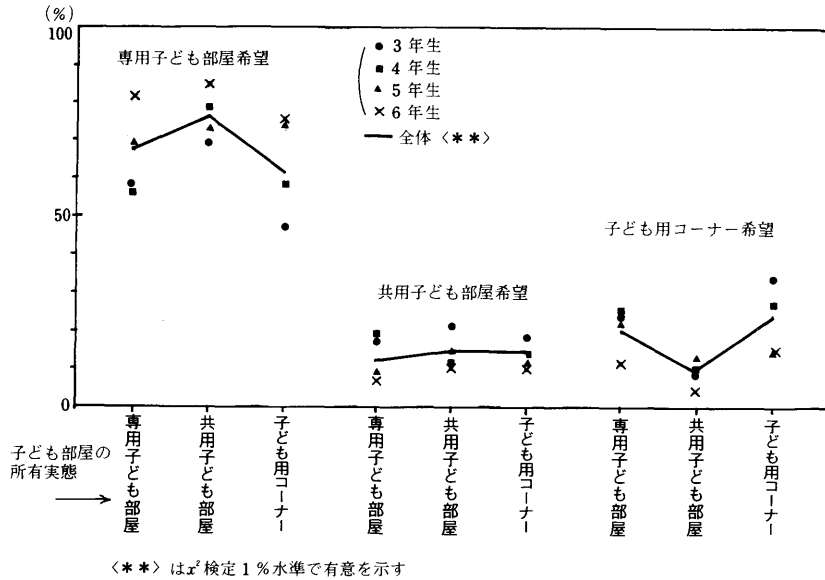


図5 子ども部屋の所有実態別子ども部屋所有に対する希望

り、男子の場合学年進行による増加の傾向が顕著であるが、女子では学年による差はあまり大きくない。すなわち、3年生～5年生までは女子の方に優先的に子ども部屋が与えられており、男子の場合3年生では「子ども用コーナー」、4・5年生では「共用子ども部屋」、6年生では「専用子ども部屋」へと順次移行する傾向が明確であり、特に3年生において子ども部屋所有の男女差が顕著である (χ^2 検定1%水準で有意)。

子ども部屋所有に対する児童の希望では、各学年とも男女間の有意差はみられないが、3年生では男子で「専用子ども部屋」希望が女子より多く、女子では「共用子ども部屋」希望が男子より多くなっている (図4)。

最後に、子ども部屋所有の実態別に児童の子ども部屋所有に対する希望の学年別の割合を、図5に示す。対象全体では、両者に関連がみられる (χ^2 検定1%水準で有意) が、実態がストレートに希望に反映されているのではなく、実態が「専用子ども部屋」の場合よりも「共用子ども部屋」の場合に、「専用子ども部屋」希望の割合が多くなっている。しかし、この傾向は、5年生段階ではほぼ解消されており、このことから3・4年生段階では「専用子ども部屋」を必要とせず、5年生段階でようやく「専用子ども部屋」のメリットを評価するようになると考えられ

る。また、「共用子ども部屋」希望の割合は、実態に関係なくほぼ同程度の割合を示し、「子ども用コーナー」希望は、各学年とも子ども部屋をもたない「子ども用コーナー」所有者と「専用子ども部屋」所有者に多く、小学生段階では「専用子ども部屋」所有者に、これを評価しない児童が存在するといえる。

(2) 子ども部屋使用における実態と希望

現在、「専用子ども部屋」もしくは「共用子ども部屋」が与えられている児童に対し、子ども部屋の使われ方の実態と希望について検討する。使用実態として、「家族が子ども部屋に自由に入出入りしている」という「子ども部屋の開放度」と、「子ども部屋のそうじや整理・整頓は、ほとんど親がしている」という「子ども部屋の管理」についての実態の割合と、「家族がはいってきたり、自分のものにさわったりしないしてほしい」という「子ども部屋の開放度」についての児童の希望の割合を図6に示し、図7には「子ども部屋のことは干渉せず子どもの自由にさせている」という「子ども部屋の管理」についての実態の割合と、「だれにもじゃまされずに、好きなことができるへやがよい」という「子ども部屋の管理」についての児童の希望の割合を示す。

子ども部屋には、各学年を通じてほとんどの家庭で家族が自由に入出入りしており、子ども部屋の掃除や整理・整頓も各学年を通じて半数以上の家庭で親

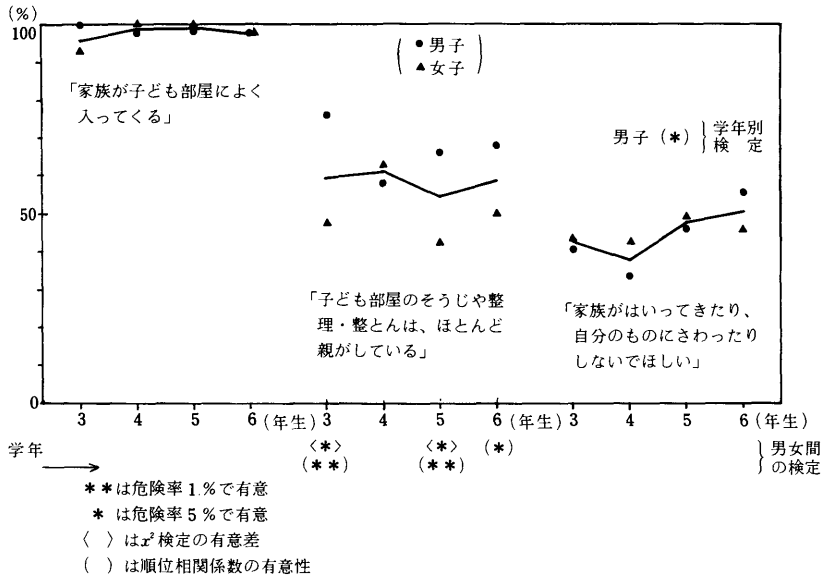


図 6 子ども部屋の使用実態と希望

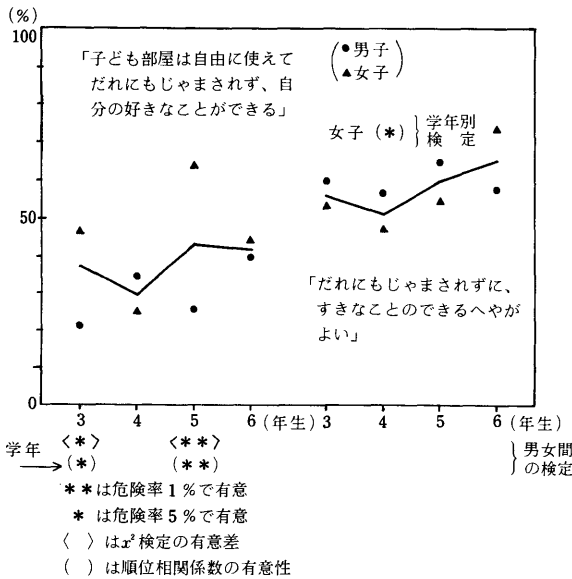


図 7 子ども部屋の使用実態と希望

が行なっている。一方、家族の入室や子どもの所有物に触れることを嫌う割合は、5・6年生で約半数に達する(図6)。また、子ども部屋を自由に使わせている家庭の割合は、5・6年生でやや増加し約4割程度を占めているが、児童の希望はその実態より

も各学年とも約2割程度上回っている(図7)。

2) 住空間の種類別にみた児童の住要求の傾向

児童の住空間に対する志向を探索するため、児童の住要求を、住空間の種類別に検討する。児童が住空間に対して示す要求は、住空間への興味・関心(志向)を示す一つのバロメーターになると考えられる。また、本研究では表1に示す住空間の種類別に作成した調査項目を、〈空間拡大要求〉〈家具配置がえ要求〉〈専用空間要求〉〈設備要求〉に分類した。

各住要求の種類別に各住空間に対する児童と母親全体の住要求率を図8に示す(なお、住要求率を算出するにあたって、住空間の実態を統一するため、各住要求について図8に示した対象に限定している)。また、図9～図12には、各住要求の種類別に、児童と母親の住要求率を学年別に算出した結果を示す。

まず、児童と母親の〈空間拡大要求〉を検討する(図8、図9)。児童の〈空間拡大要求〉率が一番高いのは「子ども部屋」であり、次いで「庭」(58.5%)、「便所・風呂」(53.9%)、「居間」(49.9%)、「台所・食事室」(46.9%)、「玄関」(44.8%)、「客間」(38.7%)、「収納空間」(37.4%)と続いており、自分の個室空間から日常よく使用する共用空間へと要求が拡大するが、非日常空間である「客間」や生活用品の管理という家事につながる「収納空間」に対する

表1. 住要求項目の分類

住空間の種類	項 目	住 要 求 の 種 類			
		空間拡大要求	家具配置がえ要求	専用空間要求	設備要求
子ども部屋	もっと広い方がよい	○			
	家具のおき場所をかえてほしい		○		
台所・食事室	もっと広い方がよい	○			
	新しい流し台や電子レンジなどをとり入れて使いやすい台所にしてほしい				○
	調理台、食器棚、テーブルなどのおき場所をかえてほしい		○		
居 間	もっと広い方がよい	○			
	家具のおき場所をかえてほしい		○		
	家族がくつろぐために使うへやがほしい			○	
客 間	もっと広い方がよい	○			
	家具のおき場所をかえてほしい		○		
	お客さんをもてなすために使うへやがほしい			○	
便所・風呂	もっと広い方がよい	○			
	設備（水洗トイレ・おふろのシャワーなど）を整えてほしい				○
	もう一つ便所をふやしてほしい			○	
その他の空間	なんがやわし入れなどの、ものをしまえるところをもっとほしい	○			
	書きや趣味のためのへやがほしい			○	
	玄関を広くしてほしい	○			
	庭がほしい			○	
	もっと広い庭がほしい	○			

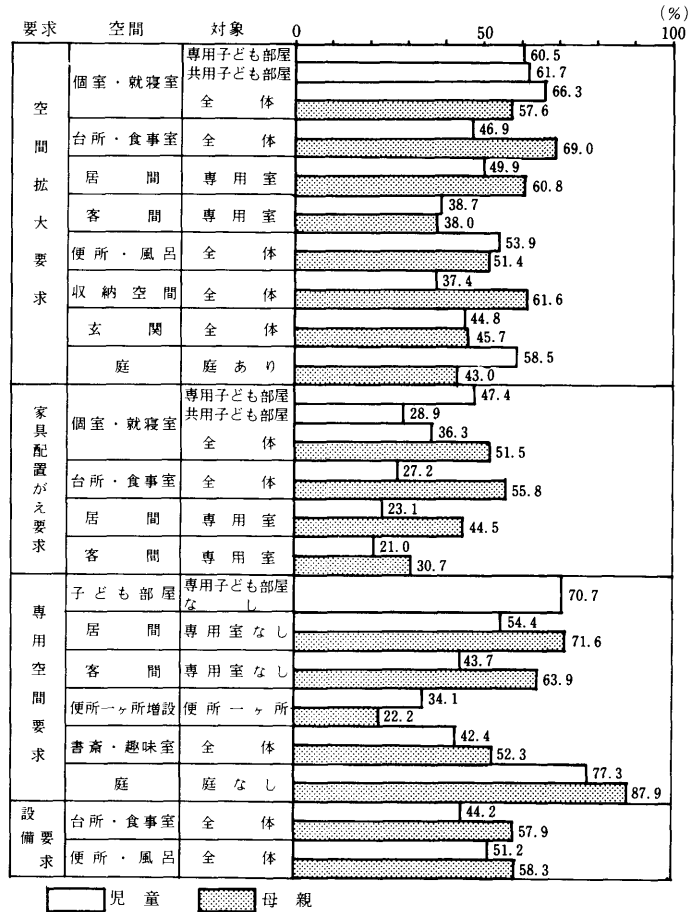
要求はやや少なく、これらの空間に対する興味・関心は低いといえよう。すなわち、児童の空間認識はその空間の使用頻度との関連が非常に強く、自分の行為が空間認識の出発点になっていると考えられる。一方、母親の〈空間拡大要求〉率は、「台所・食事室」(69.0%)、「収納空間」(61.6%)、「居間」(60.8%)、「個室・就寝室」(57.6%)、「便所・風呂」(51.4%)、「玄関」(45.7%)、「庭」(43.0%)、「客間」(38.0%)と続いており、これは家族共用の日常居室空間、収納空間、個人の居室空間、居室以外の諸空間、接客室の順である。すなわち、児童の要求率は、児童本人との関わりの強い空間の順に要求率が推移しているのに対し、母親では家事労働に関わる空間や日常居室空間への要求が高くなっている。これは、児童と母親の要求率の差が10%以上ある空間が、「収納空間」、「台所・食事室」、「居間」にみられ、すべて母親の要求率の方が高いことから指摘できる。逆に、「庭」と「便所・風呂」では児童の要求率の方が高く、「客間」では差はみられない。学年別に、児童の要求率の差異をみると、「客間」では学年が進むと要求率が減少する傾向が認められる（順位相関係数5

%水準で有意、図9）。

次に、児童と母親の〈家具配置がえ要求〉を検討する（図8、図10）。すべて居室について、〈家具配置がえ要求〉率は、母親の方が高い値を示している。児童の〈家具配置がえ要求〉率は、「専用子ども部屋」に対する要求（47.4%）が群を抜いて高く、他は大きな差異はみられないが、「共用子ども部屋」(28.9%)、「台所・食事室」(27.2%)、「居間」(23.1%)、「客間」(21.0%)と続いている。すなわち〈家具配置がえ要求〉においても〈空間拡大要求〉と同様に要求率は、自分の個室から家族共用の日常空間、非日常的接客空間へと順次減少しており、空間に対する興味・関心が、空間の使用頻度が高い空間や自分を中心とした行為空間から出発して拡大する傾向が認められる。一方、母親の〈家具配置がえ要求〉率は、「台所・食事室」(55.8%)、「個室・就寝室」(51.5%)、「居間」(44.5%)、「客間」(30.7%)の順であり、「台所・食事室」と「個室・就寝室」の順位が児童の場合と逆になっている。これは、各空間とも母親の〈家具配置がえ要求〉率の方が高い中で、特に「台所・食事室」における児童と母親の差が大きいことにもみられ、家事労働と関連の強いこの空間に対する母親の要求の強さが指摘できる。

専用空間をもたない家庭を対象に、児童と母親の諸空間に対する〈専用空間要求〉を検討する（図8、図11）。児童と母親の〈専用空間要求〉率を比較すると、「便所一ヶ所増設」を除き、母親の要求率の方が高いが、特に「客間」と「居間」で顕著である。しかし、「子ども部屋」を除く、児童と母親の〈専用空間要求〉率は、「庭」、「居間」、「客間」、「書斎・趣味室」、「便所一ヶ所増設」というように同一の順位になっている。「子ども部屋」を含めた居室について児童の〈専用空間要求〉率は、「子ども部屋」、「居間」、「客間」の順で、〈空間拡大要求〉〈家具配置がえ要求〉の場合と同様である（図8）。しかし、学年別にみると、〈専用空間要求〉率は4年生～6年生の児童では、全体の順位と同じであるが、3年生だけは、「居間」、「子ども部屋」、「客間」の順であり、個室よりも家族室の方が重視されている。また、「子ども部屋」に対しては学年が高いほど〈専用空間要求〉率は高いが、「居間」に対しては低学年の方が高い（図11）。

児童と母親の〈設備要求〉をみると、児童では、「台所」よりも「便所・風呂」に対する要求率の方が高く、児童では、ほぼ同率となっている。前述した〈空間拡大要求〉の場合と同様に、児童にとって



・個室・就寝室は、児童では子ども部屋だけを対象としているが
母親では、個室・就寝室全体を対象としている

図 8 児童と母親の住要求率

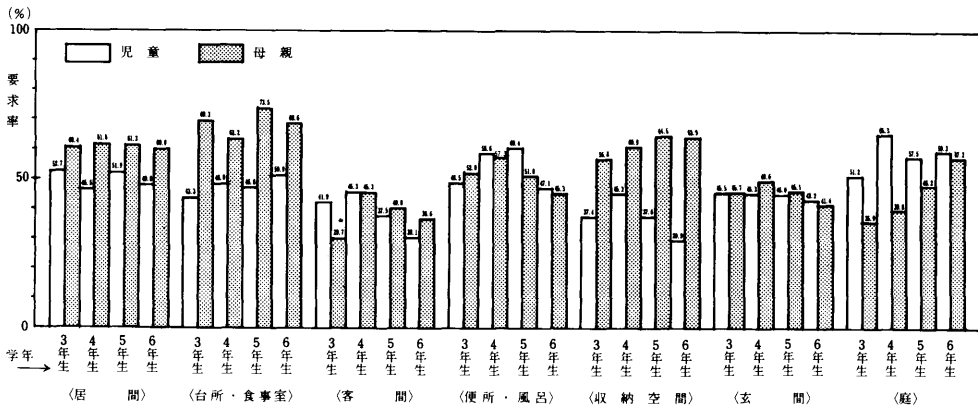


図 9 児童と母親の〈空間拡大要求〉

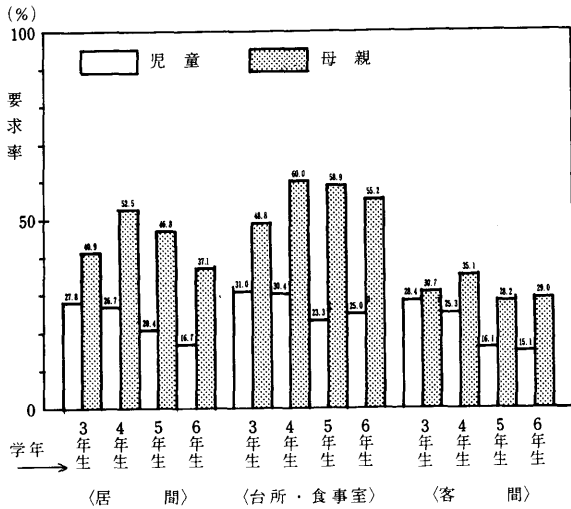


図10 児童と母親の〈家具配置がえ要求〉

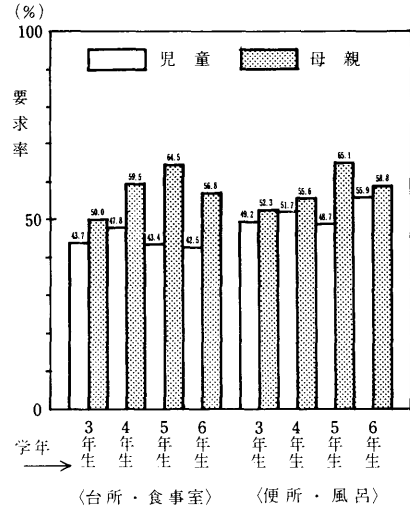


図12 児童と母親の〈設備要求〉

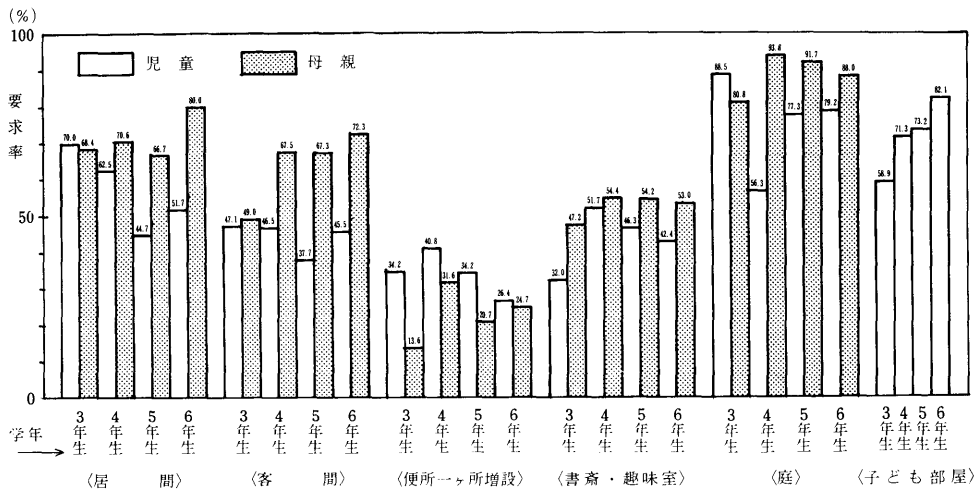


図11 児童と母親の〈専用空間要求〉

は「台所」よりも「便所・風呂」の方が興味・関心をもちうる認知の容易な空間であるといえよう。また、〈専用空間要求〉の中で、「便所一ヶ所増設」だけが母親よりも児童の要求率が高くなっていたことから、この傾向が裏付けられよう。

同一空間について、各住要求の種類における住要求率を比較すると、児童においては、「子ども部屋」、「居間」、「客間」とともに、〈専用空間要求〉〈空間拡大要求〉〈家具配置がえ要求〉の順に高くなっており、室増加、室面積拡大、室内改変と、空間改変度の大きい

要求に対する要求率の方が大きい傾向がみられる。この傾向は、「居間」、「客間」について母親にも同様に認められる。

最後に、児童の住要求と母親の住要求との関連について、その順位相関係数を表2に示し、これを検討する。対象全体においては、〈専用空間要求〉の「居間」と「客間」を除き、すべてに危険率5%水準までの有意性がみられ、児童と母親の要求には関連が認められる。同一空間を、住要求の種類別にみると、「居間」と「台所・食事室」では、〈空間拡大要求〉

表 2. 児童の住要求と母親の住要求との関連 (順位相関係数)

要求		学年	全	体	3 年 生	4 年 生	5 年 生	6 年 生
空間 拡大 要求	居 間		0.20110 ^{**} _{<2>}	0.13102 [*] _{<5>}	0.29731 ^{**} _{<1>}	0.15673 _{<6>}	0.23699 [*] _{<1>}	
	台 所・食 事 室		0.22107 ^{**} _{<1>}	0.20760 [*] _{<2>}	0.15405 _{<4>}	0.28779 ^{**} _{<1>}	0.23662 ^{**} _{<2>}	
	客 間		0.09570 [*] _{<7>}	0.07040 _{<6>}	0.20936 _{<3>}	0.18701 [*] _{<4>}	－ 0.13000 _{<7>}	
	便 所・風 呂		0.14310 ^{**} _{<6>}	0.15385 [*] _{<4>}	0.06473 _{<7>}	0.15835 [*] _{<5>}	0.17719 [*] _{<4>}	
	収 納 空 間		0.14625 ^{**} _{<4>}	0.24345 ^{**} _{<1>}	0.14830 _{<5>}	0.08342 _{<7>}	0.13045 _{<5>}	
	玄 関		0.18271 ^{**} _{<3>}	0.17372 [*] _{<3>}	0.11304 _{<6>}	0.21504 ^{**} _{<2>}	0.22001 ^{**} _{<3>}	
	庭		0.14431 ^{**} _{<5>}	－ 0.01703 _{<7>}	0.22704 [*] _{<2>}	0.20649 [*] _{<3>}	0.12847 _{<6>}	
家具 配置 が え 求	居 間		0.13985 ^{**} _{<2>}	0.21685 [*] _{<1>}	0.10208 _{<3>}	0.05598 _{<3>}	0.16870 _{<2>}	
	台 所・食 事 室		0.10591 ^{**} _{<3>}	0.08184 _{<3>}	0.14697 _{<2>}	0.08469 _{<2>}	0.13768 _{<3>}	
	客 間		0.25714 ^{**} _{<1>}	0.21572 [*] _{<2>}	0.30457 ^{**} _{<1>}	0.17493 _{<1>}	0.33261 ^{**} _{<1>}	
専 用 空 間 要 求	居 間	－	0.14183 _{<5>}	0.02564 _{<5>}	－ 0.24371 _{<5>}	－ 0.18297 _{<5>}	－ 0.15273 _{<5>}	
	客 間		0.01130 _{<4>}	0.10526 _{<3>}	－ 0.12338 _{<4>}	0.17654 _{<2>}	－ 0.14746 _{<4>}	
	便所一ヶ所増設		0.13110 ^{**} _{<2>}	0.21581 [*] _{<2>}	0.29210 ^{**} _{<2>}	－ 0.05247 _{<4>}	0.26967 ^{**} _{<1>}	
	書 斎・趣 味 室		0.17093 ^{**} _{<3>}	0.08319 _{<4>}	0.27807 ^{**} _{<3>}	0.13524 _{<3>}	0.16855 [*] _{<2>}	
	庭		0.27231 ^{**} _{<1>}	0.26968 _{<1>}	0.29277 _{<1>}	0.79349 ^{**} _{<1>}	0.11633 _{<3>}	
設 備 要 求	台 所・食 事 室		0.13699 ^{**} _{<2>}	0.16418 [*] _{<2>}	0.11095 _{<2>}	0.10444 _{<2>}	0.17475 [*] _{<2>}	
	便 所・風 呂		0.28451 ^{**} _{<1>}	0.24795 ^{**} _{<1>}	0.16986 [*] _{<1>}	0.33052 ^{**} _{<1>}	0.40020 ^{**} _{<1>}	

**は危険率1%で有意

< > 内の数字は順位

* は危険率5%で有意

の相関は「家具配置がえ要求」より強く、「家具配置がえ要求」では、児童と母親の住空間に対する志向に差異があるといえよう。これは、「家具配置がえ要求」率に差がみられたことから指摘できよう。また、「居間」と「客間」では、「専用空間要求」に、有意性がみられず、専用の「居間」や「客間」が存在しない場合には、児童と母親の住要求に差異が出現しやすいといえよう。

また、図13~16に、母親の要求有無別に、児童の要求有り率と要求無し率を示し、住要求有り無しとのどちらの場合に、児童と母親の関連が強いかについて検討する。「空間拡大要求」においては、「居間」、「台所・食事室」、「収納空間」では、児童の要求有りの場合の方が、母親の要求有無別の差が大きく、児童と母親の要求関連が強いといえる。一方、「客間」、「玄関」、「庭」では、児童の要求無しの場合の方が関連が強い。同様に、「家具配置がえ要求」においては、「台所・食事室」は、児童の要求有の場合の方が

児童の要求と母親の要求の関連が強く、「客間」では、児童の要求なしの場合の方が両者の関連が強い。また、「専用空間要求」では、「書斎・趣味室」と「庭」は、児童の要求有りの場合の方が、児童と母親の要求の関連が強く、「便所一ヶ所増設」の場合には、児童の要求なしの場合の方が両者の関連が強い。「設備要求」においては、「台所」「便所・風呂」ともに、児童の要求有りの場合の方が、児童と母親の要求の関連が強い。すなわち、一般的に要求有りの場合の方が、児童と母親の要求の関連が強いが、客間拡大、客間家具配置がえ、玄関拡大、庭拡大、便所一ヶ所増設などの非日常的空間や居室以外の空間で、要求に対する切実感の乏しい要求については、児童の要求なしの場合の方が、児童と母親の要求の関連は強くなるといえよう。

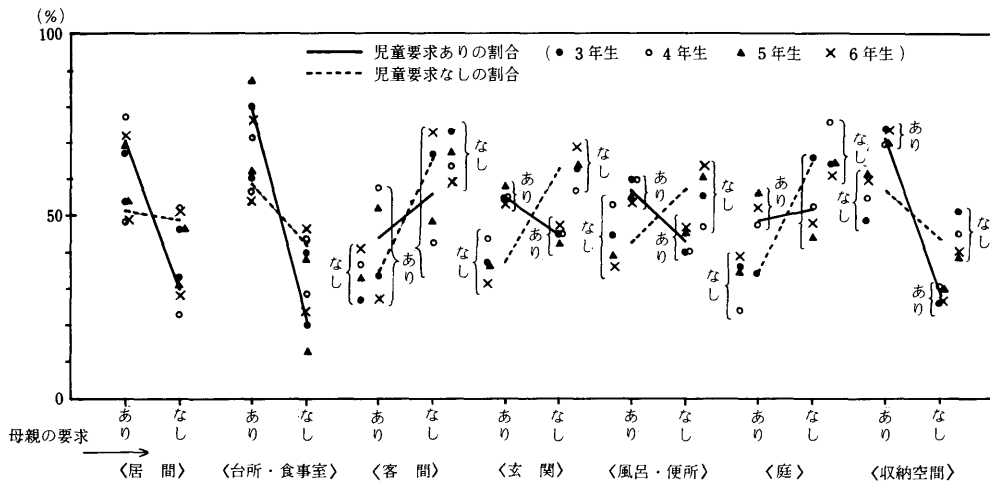


図13 〈空間拡大要求〉における母親の住要求別児童の住要求有無の割合

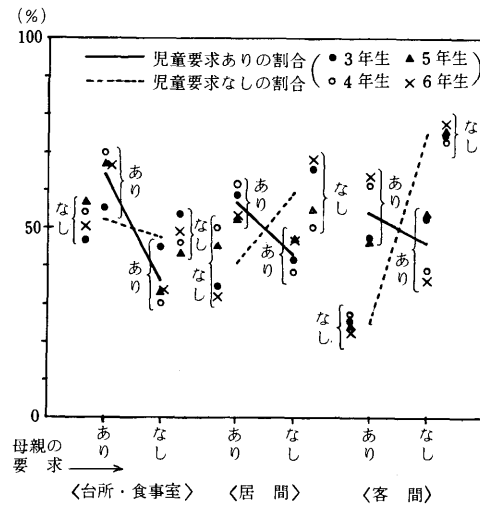


図14 〈家具配置がえ要求〉における母親の住要求別児童の住要求有無の割合

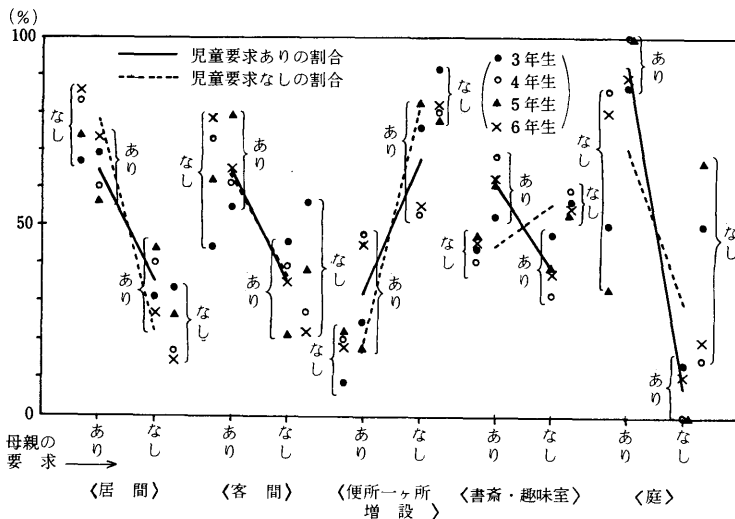


図15 〈専用空間要求〉における母親の住要求別児童の住要求有無の割合

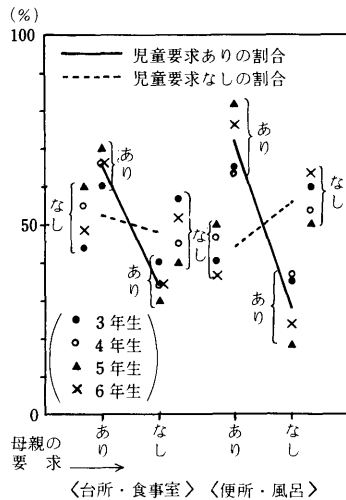


図16 〈設備要求〉における母親の
住要求別児童の住要求有無の
割合

4. 結 語

小学校3年生～6年生の児童とその母親530件を対象として、住宅の諸側面に対する住要求を比較検討し、児童の住空間に対する志向を把握した。以下に、分析の結果明らかになった諸点を述べる。

1) 子ども部屋の所有率は、4年生で急増し、6年生では8割に達し、「専用子ども部屋」の希望率も学年とともに上昇するが、所有実態よりも、各学年とも4割程度上回っていることがとらえられた。性別にみると、3年生～5年生までは女子の子ども部屋所有率の方が高いが、6年生では男子の所有率の方が高くなり、「専用子ども部屋」に対する希望率は、3年生では男子の方が高いが、4年生以上になると差はなくなることがとらえられた。また、子ども部屋所有に対する希望を所有実態別にみると、「専用子ども部屋」の希望率は、「専用子ども部屋」所有者よりも「共用子ども部屋」所有者の方に高いが、5年生になるとその差はなくなり、「子ども用コーナー」希望者は、「専用子ども部屋」所有者と「子ども用コーナー」所有者に多く、「専用子ども部屋」所有の児童には、子ども部屋所有を評価せず、不要と感じている層が存在していることが明らかになった。

2) 子ども部屋には、ほとんどの家庭で家族が自由に出入しており、掃除や整理・整頓を親が行っている割合も過半数に達しているが、家族の入室や

子どもの所有物に触れられることを嫌う率も5・6年生では約5割を占める。また、子ども部屋を自由に使用させている割合も5・6年生で4割を超えるが、子どもの希望は各学年ともその実態より約2割程度上回っていることがとらえられた。

3) 児童の〈空間拡大要求〉率は、自分の個室空間に対する要求が一番高く、順次家族共用の日常空間、非日常空間、家事関連空間と続き、〈家具配置がえ要求〉や〈専用空間要求〉でも、自分の個室空間から家族共用の日常空間、非日常空間へと要求率が推移していることが認められた。すなわち、児童の住要求は、児童本人の空間使用頻度との関連が非常に強く、自分の行為が空間認識の出発点になっているのに対し、母親では家事労働空間に対する要求が強く、違いがとらえられた。〈専用空間要求〉では、4年生～6年生では「居間」よりも「個室」に対する要求の方が強いのに対し、3年生では「個室」より「居間」に対する要求の方が強く、また、子ども部屋に対する〈専用空間要求〉率は学年が高いほど高いが、「居間」に対しては低学年の方が高いことが認められた。「台所」と「便所・風呂」に対する〈設備要求〉率は、児童では「便所・風呂」に対する要求率の方が高く、この場合も住要求と本人が使用する頻度との関連がみられた。また、各種住要求において、〈空間拡大要求〉の「個室」、「便所・風呂」、「庭」、および〈専用空間要求〉の「便所一ヶ所増設」などを除き、すべて母親の住要求率の方が高い傾向が認められた。

4) 児童と母親の住要求との間には、ほとんどの要求において関連がみられたが、〈専用空間要求〉のうち、「居間」と「客間」には関連に有意性がみられず、住空間の実態が存在しない場合には、児童と母親の住要求に差異が出現することがとらえられた。また、児童の要求有りと無し別に、児童と母親の住要求の関連をみると、一般的に要求有りの場合の方が、児童と母親の住要求に関連が強いが、非日常的空間や居室以外の空間など要求に対する切実感が弱い要求については、児童の要求無しの場合の方が、児童と母親の要求に関連が強い傾向が認められた。